



いけない写生レッスン

若叔母と美術教室の美女たち

草飼晃

表紙／高橋撰功

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	芳志恵 叔母の悩殺ストッキング……………	4
第二章	ミキ・芳志恵 初体験はふたり並べて……………	51
第三章	るみか・ミキ 筆責め天国とおっぱい天国……………	110
第四章	るみか・芳志恵 いけない射精レッスン……………	165
第五章	ミキ・芳志恵 クリスマス・イベントの秘密……………	222

登場人物

Characters

横緒 芳志恵

(よこおよしえ)

隆の叔母で28歳。スーツが似合う独身キャリアウーマンで、子供の頃から可愛い甥に目をかけてきた。長身でボリューム満点のヒップの持ち主。

サワラギ ミキ

絵画教室の講師で28歳。芳志恵の高校の同級生で今も友人として付き合っている。高飛車な芸術家肌だが、意外と面倒見が良い。

飴屋 るみか

(あめやるみか)

絵画教室を受講する23歳の専業主婦。ぽっちゃりした童顔巨乳の若奥様。

大竹 隆

(おおたけ たかし)

絵画教室のアシスタントを務めることになった青年。小さいころから叔母に淡い思慕を抱いてきた。

ゆつくりと幹を撫でながら、どこかなつかしいような体臭の若叔母がつくりたての綿菓子みたいな甘い声で言う。

「ね。だから今夜、叔母さんといっしょに、つくつちやおうか？」

「な……なにをですか」

「やーねえ。言わせる気？ いいよ。子どもを、つくつちやおうか？ ふたりで」

（な。ななな。なんだってえ——？）

隆はのけ反った。

が。同時にペニスはピコンと素直に反応して、いっそう天井を向いた。

「ほらまたあ。冗談に決まってるじゃない。すぐ本気にするんだから」

「よ……芳志恵叔母さん、おねがいだから冗談はやすみやすみにしてほしい……心臓が持たないかも……」

「これくらいのお話でなによ。わたしと本当につき合う気、あるの？」

「いや——つき合うって、そんな。ぼく困る」

「だから全部冗談ですってば」

笑みを浮かべてそう言う若叔母。

ヒリつくような射精欲求はつづいていて。ペニスの付け根あたりから肛門周りにか

けての神経が急に敏感になったみたいで、ぞわぞわする。

「隆くんをからかうと本当に楽しいわねえ」

言いながら、指は休まない。素直すぎる隆の反応を見て叔母もまたなんだか一気にひたむきさを増したようだった。

「お、叔母さん……からかっているだけ……?」

からかわれている隆にはそうは思えない――。

（本気が混ざってないか……?）

手のひらでピンクの亀頭が包みこまれ、もう片方の手指が幹の根元をそっと握って上下にごしつごしつとしごき始める。たちまち流れこんできた熱い精液が、こそばゆい快感とともに幹を駆け上がってくる……。

「ふおう」

とろりと先つぼから透明な汁が垂れた。

足指の先をぎゅつと丸めてジーン……とする淡い刺激をやり過ぎ、なんとか射精だけはこらえることができた。

「うふ」

黒パンスト姿の若叔母はさっそくその汁をすくって亀頭に塗りこめる。

ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅつ……今度は右手の指と左手の指が見事なコンビネーションを見せての同時奉仕だった。

若叔母は手加減をくわえてくれてはいるようだった。隆が限界を迎えそうになるとそのたびに、叔母は奉仕の指の強さをさつと弱めるのだ。

(で、でも、ぼく、もう……出しそう)

先走りの汁だけではない。今日は初バイトの緊張でずいぶん汗をかいた。叔母にその匂いを嗅がれているんじゃないかと思うとそれも恥ずかしい……。

ああもう出しそうだ！ いきなり出すのはまずいだらう。

(口でつたえなきや)

「芳志恵叔母さん——心臓だけじゃなくて、ぼくもうダメかも……」

「いいのよ。初任給祝いのご褒美あげるって言ったでしょう？」

「しょ、初任給って。だから別にぼくまだ就職とかしてないし」

「いいからいいから。隆くんのこれ立派だし」

若叔母は隆のペニスを褒めた。

「皮もまずまずきれいに剥けているし、清潔にしてるじゃないの」

「でも……そんなに大きくはないでしょう……?」

「そう？ 普通だと思うけど。女性は大きさに惹かれるわけじゃないの。大丈夫」

本気でそう思っているのか——芳志恵は鼻をひくつかせて自分のくちびるを舐めた。

「キスしてあげる」

「え」

「隆くんを気持ちよくしてあげる。今夜は叔母さんの口を隆くんにあげる」

だから好きにしているのよと言って——。

まろやかな笑顔とふくよかな乳房を持った独身若叔母は、半開きにしたくちびるをそつと寄せてきた——先走りであらぬ光るペニスに。

まず下くちびるが、ぴちよん、とエラの張りきったところに触れた。

「ふお」

それだけで電気を流されたようになり、隆は背をよじらせる。

甥のそんな反応に気をよくしたのか、ウフフと笑って芳志恵はちゅっちゅつとキスを繰り返し始めた。

二十八歳の温かい舌の先から唾液を浴びせ、それを舌とくちびるで塗りたくるようにして奉仕をつづける。

先走りと叔母の唾液が混じり合ってこまかい泡を含んだ白っぽい粘液の層ができ、

ぬるぬると亀頭を覆う。一部は糸を引いて若叔母の口の中に消えていく。

「うぐ……芳志恵、叔母さ、ん、すご……」

「まらまら」

まだまだ、と言ったのかなと隆は思った。それ以外に思い当たることばは隆のボキヤブラリーの中にはない。

「たかしくんのまらふごいわね……」

「……はいっ？」

意味がわからないし聞き取れなかった。

「んっ。隆くん、ここも感じるんじゃあない……ほら、ここも」

若叔母は今度は幹の方に口を寄せてきた。

亀頭から幹に向かって伸びる細い筋をピンポイントでまさぐってきたかと思うと、根元に刺激をくわえてくる。さらに横唾えしてくちびると唾液で愛撫してくる。

「くおお……」

欲望はもう渦巻きまくっていた。心臓がドキンドキんと打つたびに鈍いしびれのよ
うな快感が腰骨をヒリつかせる。出したくて出したくて頭がどうかなりそうだった。

と。不意打ちのように——かぶっ、と唾えられた。

「ははううッ」

しつかりと若叔母の口の中にエラごと含まれていた。

気持ちいい？ と若叔母が目で訊いてくる。

(う、うん……)

隆はうなずいた。ゼラチンに根元まで浸かっているような気分。

もう汗びっしりだった。ジーパンの内側も、セーターやシャツの内側も。慈愛に満ちた顔を見せると若叔母は、ちゆるちゆると音を立てておしゃぶりを始めた。

(うわわ！ も、もう、ぼく、出ちゃう……)

このまま出したらまずいんじゃないか？

しゃぶりつづける若叔母のあごから流れ落ちた唾液の筋が、隆の足の付け根にとろとろとしたたる。

「芳志恵叔母さん、ぼく、もう」

言いかけると、黒い髪と細い腕とむっちりとした太ももの持ち主は唾えたままうなずいてくれた。

このまま出しているという意味だろうか？

(で、でも……本当に？ いいの？)

訊いて確かめたくても、どうやら若叔母はもう口いっぱい含んでいるから答えてくれそうにはなかった。おしゃぶりピストンのピッチは徐々に上がって、じゅぶず、じゅぶず、と濡れた擦過音が響きわたる。

(だ、だめだろ……叔母さんの口の中に出しちゃうだなんて！)

さすがにこれは、ま、いいか、とは思えない。

でもでも。

温かい口の中の居心地のよさ。少しだけざらついた舌の上でまさぐられる愉悦。歯茎で擦られるしあわせ。

(いや、だめだ……出すのは恥ずかしすぎるし！ やっぱり口の中へはマズイだろ！)
我慢だ。

こらえなきや。

くぶ、くぶ……若叔母の顔の動きがだんだん激しくなり、二十八歳の豊満な上体が前かがみになっていく。ブラに包まれたおっぱいが頭の動きに合わせてぶるん、ぶるんと揺れた。隆の気を惹くかのように。

こりっ——歯茎で傘を甘噛みされた。

「くおっ出るッ……？」

たちまち精液の奔流が亀頭の先端をどろりと割った。

(しまった！)

出ちゃう……！！

「——くうッ！」

意思を持った細長いどろどろの生物のように、熱い粘液は次々と尿道口に襲いかかってきた。

口の中に放つ初めての快感は最初にオナニーを知ったときの気持ちよさ以上だった。
「まだ——出る……くわぁ」

もう一度ぶりゅッ！ と亀頭がうねった。さらなる噴きこぼしに驚いたように若叔母が目を見開く。それからゆつくりと目を閉じると隆の屹立を啜えこんだそのまま、こくん、こくん、と喉を動かし始めた。

(よ……芳志恵叔母さん！ の、の、の。飲んで、くれてる……?)

声に出して訊こうとしたが。

「芳志恵叔母さ……うお！」

まだ爆発が残っていた。どくん、どくん、と追い打ちのように若叔母の口内に向けて放っていた。最近寒くなってきてオナニーしていなかったから溜まりきっていたせ

いもあるのだろう。でも。

（お……叔母さんがいくらやさしいっていても……さすがにまずいだろう、こんなに何度も……ッ！）

そう思っても、始まってしまった射精は気持ちよすぎるし、止まってはくれない！（うわっ、嘘だ——まだ出る……？）

痛みになら近いような鋭い性感が腹の底からまた衝き上がる。びく、びく、びく、びく、と肉棒は脈を打つ——。

それからようやく鎮まってきた。

ところが。

「え。えっ？」

出し終わって敏感になりきった亀頭をぬるりと咥え直された。おまけに女らしい細い指が睾丸をころころともてあそび始めた。

腰を少し揺すると叔母の口の奥の方に亀頭が当たってしまった。叔母はびっくりしたように少し眉を寄せたが、咥えるのをやめたりはしなかった。

逆に温かい口粘膜でしっとり包み直してくれる。

「うわ、うわ、芳志恵叔母さ——やばいっ！」

どくり……そのひと噴きはそれまで以上に気持ちよかった。尖りきった性感に脊髄を後押しされて熱い精液が尿道を拡げながら駆け、異性の口の中にどぼどぼと着地していく――。

まだ若叔母は口に含みつづけてくれている。

その顔は耳までほのかな朱色に染まっていた。

二十八歳の叔母――というより、ひとりの女の顔だった。

ごくん、と今度ははつきりみだらな音を芳志恵の喉は鳴らした。

それから。

やつと芳志恵の口が――離れた。

「はあ……」

これは隆の吐息だ。

「くはあーっ」

こちらが芳志恵の吐息。

若叔母の上くちびると下くちびるの間に、精液の残滓が粘った糸を引いていた。

「はあ……はあ」

荒く息を吐きながら隆は思う。

またパツと口が離れた。

「……え？ えええー？」

泣きたくなってきた。

またしても焦らしたった。今度はるみかは口に唾えこんだりはせず、舌先を伸ばして外から裏筋にちろちろと刺激を与え始めた。

「ひうう……それも、もう、ぼくは」

「いいのよ」

羽交い締めしたままミキが言う。

「我慢しすぎじゃない？ 遠慮はしなくていいのよ。アタシもるみかさんも、そんなことのできみのことをキライになったりしないから……るみかさんも、あんまり意地悪なんかしないで、そろそろ出させてあげたら？」

「そうねえー。そうしよつかない？」

「い……いや——だから」

なにを言おうとしていたのか、隆はもう自分でもわからなくなっていた。

小柄な巨乳若妻は男子高校生の玉袋を揉みながらつやつやの頬で亀頭を擦ってきた。背後から講師も隆の乳首をいとおしそうにネチリとまさぐってきた。

それが仕上げになった。

いまだかつて味わったことのないほどの絶頂感がこみ上がってきて――。

「うおおお！」

思わずさげんでいた。肉棒の根元から腰全体に熱い解放感が弾けた。次の瞬間、るみかの顔めがけて熱湯のようなほとぼしりをぶちまけていた。

「くうううっ！」

「きゃっ」

隆の射精は今日も長かった。どくん！ とひと噴きしてそれで終わるかと思いきや、追い打ちのような発作に見舞われる。ぶるっ！ ぬぶる！ 水を浴びた犬が水滴を払うように、隆は身震いを繰り返しながら、ぶりゅぶりゅりと射精をつづけた。

十数秒後――。

そんな射精がやっとおさまって。

「大人しそうに見えても、男の子なのねえ――すごいわ」

ミキが呆れたように言う。

「べとべとだあ……うわあ、モデルくん、すごっ。こんなに溜めてたんだあ」

まぶたの上から頬にかけて、そして鼻の頭からあごにかけてと、隆の放ったゲノム

液によるねとねとの白い橋ができています。片目はうまく開けられないようだ。

それでも、るみかには当たり前といった口調で隆に訊いた。

「まだできるわよねえ？」

清楚で無邪気そうな童顔の下に熟れて煽情的な肉体をそなえた若妻は笑うと、隆に、モデル台の上で仰向けになるようにと言った。

「え……あの」

「いいから。るみかさんに任せなさい」

どうするつもりなのか訊こうとした隆を、ミキが無理やりおさえつける。

首だけ起こして前を見ると、るみかがスカートをひるがえして足首から小さなショーツを抜き取っていた。

「るみかさん……な、なにを」

「あたしとセックスしよう」

若奥様はウインクした。

「いや……そんなはつきり言われても」

「いやなのお？ きみのソコはまだできるって言ってるよう？」

「い、いやじゃあ……ないですけど」

「よかったあ」

るみかはスカート姿のまま仰向けの隆の胸の上にまたがった。

(うわああああ……るみかさんのアソコが)

ひるがえるスカートの下で一瞬だけ見えた。

その光景に生殖本能が後押しされて、隆のペニスは垂直にそそり勃ってしまった。

「さあ。アタシがかぶせてあげる」

ミキ先生の声。この感触は覚えている。コンドームだろう。身をよじろうとしたが
できなかった。胸の上になるみかの体重がかかっていたし、足首の上には避妊具をつけ
てくれている講師が腰を下ろしている。

ひんやりとしたゴムの感覚に勃起が根元までくるまれていく。

「濡れてないかね」

とろり——ミキが真上から唾液を垂らしたようだ。

「うふふつ。じゃ、しようねえ、モデルくん」

成熟した曲線の若奥様はいったん腰を上げてそのまま後ろに下がり、勃起の真上に、
熟れた身体を持つてきた。

片手は自分の鼠蹊部そけいに添え、片手はそつと隆の勃起に触れて、角度を合わせながら

ゆつくりと結合させにかかる。

入る瞬間、

「んっ」

と、るみかはおとがいを突き出すようにしてうめいた。

白かった頬がみるみる紅潮していく。

「わわっ……」

これは隆のうめき。

ぴちぴち若妻が体重を降ろしてくるので自然に呑みこまれていく。それがこわくて隆はぎこちなく腰を揺すってしまった。しかしるみかは自分からも動いてそのまま受け入れてくれる。

隆は菌を食い縛った。

徐々に、徐々に、入りこんでいく——。

(るみかさんの中って、なんか、ぬるぬるしてる……!)

ろくに前戯などしていないはずだった。隆の方はさんざんるみかとミキのふたりにイジられたけれど。それとも男子高校生をイジるという行為そのものが興奮のスパイスになっていたのか。

「うふふっ……なんか、すごいかもモデルくん……」

むっちりとした熟れた乳房と尻を持った若妻は、仰向けの隆に中腰でまたがったままでエプロンの胸元をさらにはだけさせた。こぼれ出たGカップ巨乳がふるふる揺れる。その光景に理性という鎧がぱりぱりと剥げ落ちて本能が剥き出しになってくる――。

「それっ」

るみかがとうとうぺたんと完全に腰を降ろした。

とたんに。

「うわわ」

「……ふうん」

隆とるみかがほぼ同時に声を上げる。もちろん、うわわ、が隆だ。

肉棒は根元まで呑みこまれていた。

フライパンで熱してとろけかかったバターのかたまりのようなぷりぷりの膣粘膜。

「ふうわ……モデルくんの、かたちが、なんだか、わかる……ふぁ。ふぁ」

童顔若妻の下腹部が少し動くだけで、ごり、ごり……と擦れる。

るみかは馴れているのか、たくみに腰を回転させては隆に刺激を与えてくる。それとも動くことで自分も気持ちよくなっているのだろうか――考えているゆとりなどほ

とんだなかつた。

目の前が真っ白になってきた。

(ぼく、ぼく、どうかなりそう——セックスつてやっぱりこんなにすごいのか……?)
身体全体がなんだか剥きたての亀頭みたいに感じやすくなっている!

「もつと……モデルくん、あたしの中でゴンゴンさせて、いいからあ……ふあ」
むっちりとしたG乳房の若妻が今度は少し身体を前に倒し、擦りつけるように動か
し始めた。すると女性器と肉棒の合わせ目からねちゃねちゃと音が立つ。

るみかが隆の手を取って自分のおっぱいに触れさせる。
もちつとした触感が手のひらいっぱい広がった。

その次の刹那。

「くうう……るみかさん……そ、それはっ」

ペニスが主婦の中でごりつと擦れた。気持ちよすぎた!
隆は全力で射精をこらえようとした。

「ひあ……ぼく、そんな、とこ、まで」

「——ふあ。ふうああ。ひああ、すごいかも」
なんだか鼻声だ。

隆のものはもう、るみかのいちばん奥深いところに入りこんでしまっているようだった。小柄とはいえ大人の女性ひとり分の体重がかかっているのだ。

「ううん……モデルくんのとって、やつぱり、硬いんだあ……いいよ、すごい」

「く……くうう、でも……ぼく……!」

隆はろくに返事もできない。

コンドームはしているからこのまま放ってしまっても責められることはないのかな、と意識の片隅で思った。

(だつたら……いいか。いいよな!)

腰を自分から動かしていた。

下からだから思うような動きにはならない。でもるみかの身体が小さく体重が軽い分、隆も多少の主導権は取り戻すことができた。

「あ……ああん……あたし、息が、できなく、なつてきちやう……ふわ。ふわあ」

今度切羽詰まったような声を上げたのは、るみかの方だった。

(ようし——くおっ?)

肉粘膜の輪の内側を擦り上げると、その奥でなにかがドツとしぶいたのがわかった。こまかな肉ひだがうねり、熱い蜜を噴き出しているようだ——。

(すげっ……)

隆はなおも下から動かした。自分の腰骨をるみかの腰骨めがけてぶつけるように。そのたびに亀頭の先端がうねる肉ひだにからめ捕られる。二回。三回。女性器はうねうねとペニスを締めつけてくる。

(やっぱい……出そうだよ！)

経験の浅い高校生は動きを止めた。やっぱりもつともつと長くるみかの中にいたかったから。豊満な乳と丸い尻を持った若妻は動いた方が自分を感じるのか、またゆつくりと腰を躍らせ始めた。

「う……うあ……るみかさん、うねうね、からんできて……う。う」

放精の予感が全身を貫く。隆はそれに全力で抗あがった。叔母とミキの身体を知る前ならもうこぼしていただろう。少ないながらも前回の経験が、まだなんとか持たせてくれている。でも。

「ふあ。ふあ。あ……あたしも、おかしくなりそう……あ、やだ」

女らしい豊熟に恵まれた若妻が隆の手を握り、やわらかくて張りのあるダブルミルクタンクに押しつけさせた。指がみずみずしい肉果実にくにと食いこむ。

るみかは腰を上下させ、つづいてブルッ、ブルッ、と上体を震わせた。それに合わ

せて膣内のぬるぬるひだが圧迫を増す。

「るみかさ……すご……締めないで」

「だ、だって、カラダが、はぁん」

ぴちぴちの太ももが隆の身体の横でヒクついている。

「あたし……軽く……イッてるかも……」

またるみかの身体がビクッと震え、薄く血管を透かしたおっぱいがぶるんと揺れた。ピンクの乳首の先からクリームのようにねっとりとした汗が飛ぶ。

「るみかさん、ぼくもう出る……イク」

「まだ、だめえ……モデルくん」

深い乳房の谷間と深い食い締め的女性器を兼ね備えた若妻の哀願するような声を受けて、観戦していたミキが隆の手を引っ張った。

「我慢しなさい！」

「ひい」

手の甲をつままれて射精欲は少しだけ遠のいてくれた。でも切羽詰まった状況にたいては変わりはない。我慢できるわけがない！

一方――。

るみかとは落ち着きを取り戻したようで、また自分のペースで動き始めた。

「ふああ……ふああ——モデルくん……いいよ……たのもしいよ……ふはあ」

（え……？ るみかさん、イッたんじやなかったの？ 軽くイッてるかも、つて言うたくせに——軽くイッただけ？）

「ああ……モデルくん、やっぱり角度もいいよねえ——当たるところがなんか違う」
気持ちよさそうにゆるゆる、ゆるゆる、と腰を振る若妻。今度は自分の手で巨乳を揉み始めている。

（うう、そんな……るみかさんをイカせられたのかなって思ったのに——るみかさん、余裕を取り戻してる！）

「ちよつと、きみ。きみがもう一回揉んであげなさいよ」

つねっていた手を放し、ミキが言った。

隆は空いていた方の乳房にぎこちなく手を当てる。お湯を満たした大きな風船の表面にそつと触れるように。風船を割らずにキュツキュツと擦るように。

「ああ、ああ、あ……えつちなんだあ、そんな、揉み方しちやつて……ふんああ」
るみかがとろんとした目つきになってきた。

もうその瞳はたぶん隆を見てはいない。ひよつとしたらなにも見えてはいないのか

もしれない。あんあんと言いながら自分で腰を揺すっている。

二十三歳の若妻の身体の熱はますます高まっているようだった。あごからはよだれなのか汗なのかわからないものがしたり落ちていた。

(や、やっぱり、ぼくももう我慢なんか、できそうに、ない——)
さつきより——。

(さ、さつきより、るみかさんの奥が、すごく熱い……!)

挿入したときはここまでではなかったと思う。今はコンドーム越しでもはつきりと膣肉熱を感じ取っていた。

見るとるみかはときおり、ぐつと口の中で歯を噛みしめている。小鼻がふくらんでヒクヒク震え、それにつれて頬に差した朱がさーつと濃くなってきた。

「どうしよ……ふあ。ふあわ。きもち、よく、なっっちゃう……あ。あ。あ」
(るみかさんも……イキそう、なのか……?)

そういえば。手のひらで感じる南国果実おっぱいもより熱くなってきたような気がする。思わずむぎゅ、と力をこめていた。

とたんになるみかの腰がビクン! とうねった。そのままるみかの丸いお尻が隆の上でくねくねと動き出した。

乳首は今にも母乳でも出しそうなほどに膨張していた。こんなにやくみたいにピチピチなそれをつまむと、まるで呼応するように膣の奥がキューツと締まる。

(す、すごい……っ)

隆ももう自分の身体を自分でコントロールできなくなっていた。るみかの腰の動きに応えるように自分も下から突き上げ、腰をうねうねと使う。

「ふおう——るみかさあん、るみかさん」

「モデルくうん……硬いよお……ふぁわん、ふぁわん」

ペニスの先端は膣の奥を突き、るみかが腰を少し浮かせるたびに少し戻り、そしてまた奥を突く。

にゅち、にゅち、にゅち……それが繰り返された。溶けかけバター膣の内部ではひだがみっちりとからみついて肉棒を離すまいとしている。

(す……すごい。これが人妻の腰遣いってやつ?)

自分の身体の上で弾むように動く若奥様のお尻は、おっぱい同様に感触もよい。

こんなものを経験してしまつて、ぼくはこれからどうすればいいんだろうか——と隆は一瞬本気で悩んでしまう。

「ああ、もうアタシ、見てるだけじゃたまらない……」

不意にミキがそんなことを言い出した。

横から抱きついて、いきなりミキが隆のくちびるを奪ってきた。

くちびるを重ねたかと思うと、独身女流アーティストはいきなり舌を入れ、隆の歯茎をねちねちとまさぐってきた。

(ぼ、ぼく、もうダメだ……)

口セックスでの快楽と性器セックスでの愉悦。ダブルの刺激に、先ほどもみかの顔に向けて放ったばかりのペニスに早くも今日二回目の限界が訪れる――。

(ぼっ)

ぼく。

ぼくイク……!

下腹部ばかりか腹筋も背骨も肩も震わせ、きしませて、隆は射精を迎える――。

(イク……出るッ。るみかさんッ)

「うあう」

同時に――。

高校生の身体の上で若奥様の身体もぶるつと重く痙攣した。

「モデルくうう……うああんっ!」

るみかさんもイッているのか——。

喉の奥から絞り出すようなそのひと声だけでは、隆にはわからなかった。

(ぼく、ぼく、ぼく、まだイク……！)

自分のことでせいいっぱいだった。次から次へと波のように射精感がこみ上がってきてこわくなるほどだった。

(やばい、まだ気持ちいい……)

みずみずしい二十三歳の女体に乗っかられた状態での射精の悦楽は、思っていた以上のものがあつた。

「る、るみか、さぁん……ぼくまた！」

隆の体内を甘い快感が駆け抜け、また一気にペニスの頂点へと進んできた。

(お、お、おさまらないのは、なんで？　なんでこんなに気持ちいいの？)

この前からそうだった。オナニーのときには射精なんて一瞬で終わるのに。

ぼくの身体はおかしくなってしまうたんだろうか。それともるみかさんたちの身体やおま〇こがすばらしすぎるから？

声も精液も出てしまう——。

「うおおおッ……ッ！」

意識が飛んでしまう。

頭の中が真っ白に塗りつぶされてしまう――。

身体の中に甘いしびれがいつぱいに充満したままで、びくびくびくびく！ と痙攣する！

そして目の前では若妻も、

「はああ！ モ、モデルくんがあ！ やあ！ やああ！ るみかも今！」

身体をくねらせ、太ももをのたうたせて悶えていた。腰骨がダンスを見せつけ乳房がぷるんぷるんと弾む。かと思うとググッと背すじが反り返り、白い喉首を晒してゐかもまた嬌声を上げる――。

それからようやく。

長かった射精が終わった。

「はああ……はああ……はああ……ぼくもう無理」

「す……すごいんだね、モデルくん……はあはあ」

るみかも汗びっしょりになっていた。白かったおっぱいまでもがまだ、朱色に上気している。

隆の目の前で、若妻の腰が名残りを惜しむようにもう一回ブルツと震えた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!